

2020/03/29

「思うべき限度とは何か」

「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののけに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」

(ローマ 12:3)

思うべき限度を越えるとは、自分にはどうすることもできないことを、考えすぎてしまうことです。スーパーで買い占めに走る人たちも、悪い状況を考えすぎて、行き過ぎた行動をとってしまうわけです。

人にとって、思うべき限度を越えてしまいがちなものには、どのようなものがあるでしょうか。

1. 死

思うべき限度を越えてしまいがちな代表の一つは、「死」です。「いつ死ぬのか。死んだらどうしよう。」と人は不安に陥ります。しかし、イエス様は「自分がいつ死ぬのかは誰にもわからない。自分のいのちを延ばすこともできない。」と言っておられます。

死を考え過ぎると恐怖につぶされ、パニックに陥ってしまいます。死を回避しようと走り回っても、肉体の死は必ず訪れますし、そんなことは誰もがわかっています。これは神にゆだねるべき内容なのです。

今、コロナウィルスの流行によって、「終わりの時が近いのではないか、終末・再臨が近いのではないか」「まもなくこの世界はなくなるのだから、仕事など辞めて神に仕えるべきだ」と考える人たちも出てきました。こういうことは歴史上、何度も繰り返されています。

しかし、私たちの内にはすでにキリストが共におられて、すでに再臨は成就していることを、イエス・キリストは教えておられます。神の国は私たちのただ中であって、私たちに死は存在しません。イエス様は、「信じるあなたがたはすでに永遠のいのちを持っている」と言われました。私たちにとって終わりの日はすでに到来しており、何も心配する必要はないのです。さまざまな噂に惑わされないようにとイエス様ご自身が忠告しておられます。

2. 救い

誰が天国に行けるのか、自分は救われているのかという問題も、私たちの思うべき限度を越えています。救いはすべて神の範疇で、人ができることはその神の御手にすぎることだけです。

「どうすれば天国に行けるのか」と考え過ぎてしまうと、人が考えつくことは、せいぜい善い行いを積み上げることくらいです。すると、私たちは行いのない人をさばくようになります。すべて神にゆだねることが必要です。

3. 罪

何が罪かということも、人にはどうにもできないことの一つです。特にクリスチャンは、何が罪で何が罪でないかと考え過ぎる傾向にあります。そうすると、良心が痛んで罪に押しつぶされ、怖くて何もできなくなってしまう。

聖書は、罪は病気であると教えています。それを自分の力で何とかしようとする、「自分はダメだ」「こんな自分では天国に行けないのではないか」と自分の罪に押しつぶされてしまいます。

あなたは、思うべき限度を越えて、死、救い、罪を勝手に想像し、勝手にパニックを起こしていないでしょうか。実は、すべてのパニックはこの3点に集約されます。思うべき限度を越えてしまうと、自分で自分の首を絞めてしまいます。

■信仰の量りに応じて

思うべき限度を越えてパニックに陥らないようにするためには、「神がおののけに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい」（ローマ 12:3）とあるとおり、自分ではどうすることもできないことに対して、信仰という計測器を使い、慎み深い考え方をすることです。

1. 死について

「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」（ローマ 6:4-5）

「死」を考えるときには、キリストを通して考えなさいと教えられています。キリスト抜きで「死」を考えると恐怖でしかありません。しかし、信仰でキリストの死を見るならば、そこに見えてくるものは、復活であり、勝利であり、希望です。信仰の量りによって、イエス・キリストの十字架の死を見るならば、私たちは、いつ死んでも自分もキリストのように復活するのだという希望を見ることができるようです。

2. 救いについて

行いによって救いを判断しようとする、こんな自分は救われているのだろうか、本当に天国に行けるのだろうか、と誰もが不安になります。しかし、救いを疑うということは、神に恥をかかせることです。神は、「信じるだけでいい」「受け取るだけでいい」「神の呼びかけに応答するだけでいい」と語っておられます。

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」(ローマ 10:10)

信じるだけで救われると言われているのに、「善い行いがなければならない」と思い込み、善い行いの報酬として救いを受け取ろうとする人、神の前にへりくだろうとしない人に対して、神はその人に自分の罪を知らしめ、自分の力ではどうにもならないと教えます。すると、神の前にへりくだって救いを受け取ることができるようになるのです。神の救いは、罪人しか受け取ることができません。自分が罪人である自覚がない人は、救いを受け取ることができないのです。

3. 罪について

人は、どんなに努力しても罪を犯してしまう存在です。どうにもならない自分を責めても意味がありません。信仰でキリストの十字架を見上げると、自分の罪が赦されているというメッセージが見えてきます。このメッセージを受け取ることができる人は、なんと幸いでしょうか。自分を責め、自分の罪を恥じるということは、神を嘘つきにすることです。信仰で自分の罪を見るなら、神を信じている私は大丈夫だということを確認することができます。

「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」(ローマ 8:1)

私たちが信仰でキリストの十字架を見上げるなら、私の罪は赦されているという感謝がわき起こります。しかし、信仰を使わず、ただ自分の罪を見つめてしまうと、良心に押しつぶされてしまうでしょう。私たちが見るべき相手、思うべき相手はキリストです。キリストを無視して、ただ問題を見ても恐れが生まれ、パニックしてしまいます。しかし、キリストを見て、キリストを思うことができれば、パニックすることはありません。これが信仰です。信仰とは、キリストを見上げ、キリストを思うことです。

■ギデオンの300

旧約聖書に、ギデオンという人物が登場します。神はギデオンに偶像礼拝と戦うためミデヤン人を討つように命じられます。彼は非常に恐れて、神に何度もしるしを求め、その都度神はしるしを与えました。こうしてギデオンは立ち上がりますが、戦いのために集まったイスラエルの兵士は、ミデヤン軍 13 万 5 千人に対して、3 万 2 千人でした。ところが神は「多すぎる」と言って、恐れる人は帰るようにギデオンに命じさせたのです。すると、2 万 2 千人が帰り、イスラエル軍は 1 万人になってしまいました。しかし、神はそれでも「多すぎる」と言って、次に、水辺で水を飲ませ、手ですくって飲むものだけを戦いに残すと、残った兵士はわずか 300 人になってしまいました。

神はその 300 人で戦うように命じ、彼らは神に命じられた通り、夜中にミデヤンの陣営に

行って、笛を鳴らしてたいまつを壊し、陣営を真っ暗にしました。すると、ミデヤン人はパニックを起こし、味方同士で戦い始め、イスラエルは直接敵と戦わずして勝利を収めることができたのです。

いったいイスラエルは何を見て戦ったのでしょうか。敵ではありません。敵を見たら負けてしまいます。彼らは神を見上げ、神のことばによって戦ったのです。

私たちは直接敵と戦うわけではありません。「キリストを見上げない」「神を頼らない」という不信仰と戦うのです。ギデオンも当初はこんな人数で勝てるわけがないと言って恐れました。しかし、神を見て戦った時、勝利を収めることができたのです。

つまり、私たちが見るべき相手、関わるべき相手はキリストであるということです。キリストが戦って勝利を収めてくださいます。あなたの不安、恐れは、死、天国に行けるのかという不安、そして罪からきます。もし、それらを直接見て戦おうとするとパニックを起こし、余計な惑わしに会います。しかし、キリストの言葉に心を向けるなら、勝利と平安を得るのです。

「どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。」（ローマ 15:13）

私たちの神は望みの神であり、望みを満ち溢れさせてくれる。すべてのことを信仰によって見るとき、神は、私たちに望みをあふれさせてくださいます。私たちが信じるべき平安、それはキリストとともに十字架で死ぬことです。キリストを見上げて、自分も十字架で死んだということを信じるのができたら、最高の平安を手にすることができると聖書は教えてくれます。

ルターは、「死への準備への説教」という本の中で、十字架で死ぬことを教えています。

「キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」
(ローマ 6:9-11)

あなたはキリストとともに死に、罪に対しても死んだのです。そして、キリストがよみがえったようにあなたもよみがえったのです。こうして、あなたの内にはキリストが生きておられるのです。キリストが私のすべてだと信じられるなら、最高の平安を手に入れることができます。これは昔から変わらないメッセージです。

あなたの不安や恐れをイエス様が背負って死んでくれたのだから、あなたも不安と恐れと一緒に死に、キリストと共に復活にあずかるうではないか、これが十字架に死んで十字架に

生きるという昔からのメッセージです。これが私たちに最高の平安をもたらします。

「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」（ローマ 6:4）

私たちはキリストとともに葬られました。現実を見たら、自分の罪深さ、死への恐れ、不安があるでしょう。しかし、それは思うべき限度を越えて傲慢になっているからです。もっと慎み深く、神から与えられた信仰で見ましょう。そうすると、現実がどうであれ、キリストの十字架を自分のものとして受け止められるようになります。

今の時代に必要なものは、まさに信仰の量りを使うことです。今こそ、キリストを見上げ、キリストを思って生きていきましょう。